

勝山おもしろ読本第集

勝山神明神社
物語



発行 勝山地区工口推進協議会

勝山神明神社
物語



昭和 1 1 年 神明神社遷宮祭

目次

編集にあたり

日本神社様式図説

日本神社鳥居十八種図

一. 神社の起源

二. 境内を歩く

三. 神社配置図

四. 神明社供物

五. 神明祭と御前相撲

六. 東京大相撲の巡業

七. 神社スナップ

1

3

6

7

10

17

28

41

51

54

写真

表紙 神明神社拝殿

中表紙 昭和十一年神明神社遷宮祭

裏表紙 成器堂（読書堂）

日本は神国である。全国津々浦々に神社が祀られている。

元旦の歳旦祭に始まり十二月暮れの大祓式までいろんな儀式があり、春や秋には祭が立ち、宵祭には夜店が賑わい、神輿が担がれ山車が引かれるが、祭神が何であり、また、その由緒についてはほとんど知られていない。

氏子でありながら神社の歴史についてはほとんど無関心である。

神社は、官幣社、国幣社の大・中・小社に分かれており、その他に別格社がある。

官幣社とは歴代天皇及び皇族を奉祀する神社(橿原神社・吉野神社・明治神宮・鎌倉宮等)、国幣社とは国土経営に功績のあつた神社(気多神社・熊野神社・金毘羅宮・白山比咩神社等)である。また、別格社は国家に特別顕著な功労のある臣下を祀つた神社(湊川神社・東照宮・豊国神社・尾山神社・結城神社等)で、合わせると数千

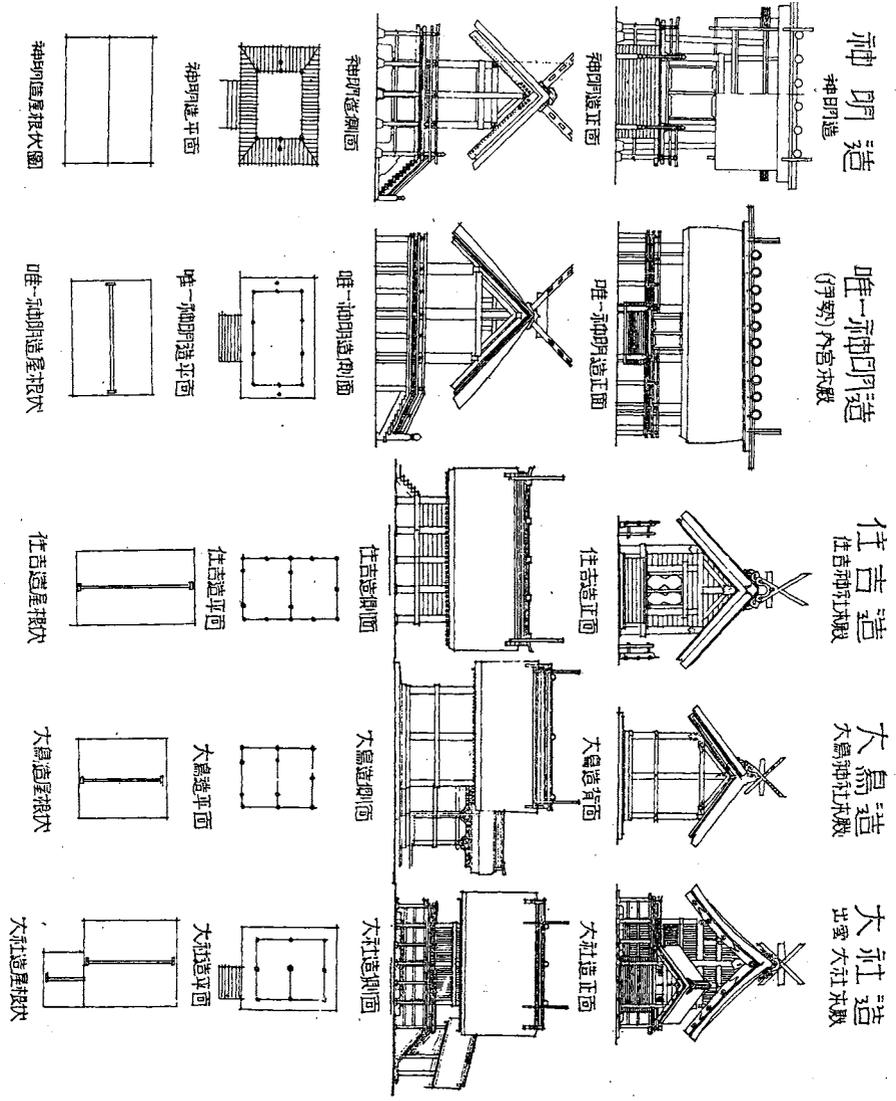
社になる。

神社の歴史はさておき、今回、勝山おもしろ読本第二集「勝山神明神社物語」と題し、神社にまつわるエピソードを勝山地区エコ推進協議会において編集した次第であります。

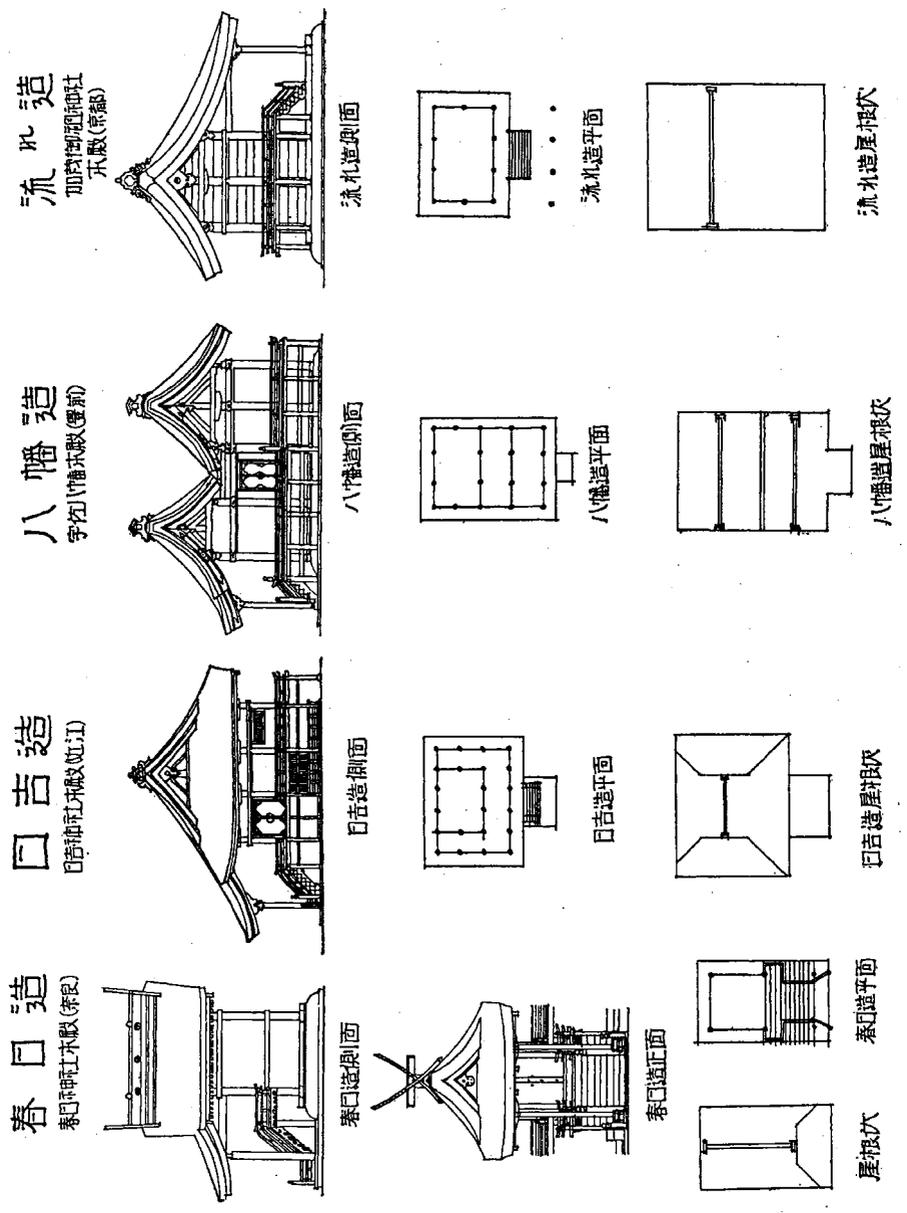
神明神社も、勝山の歴史を学ぶ上で重要な町の博物館であります。しかし、歴史も古く、不明な点や記載できない点も多々ありますが、お許しいただきたいと思えます。

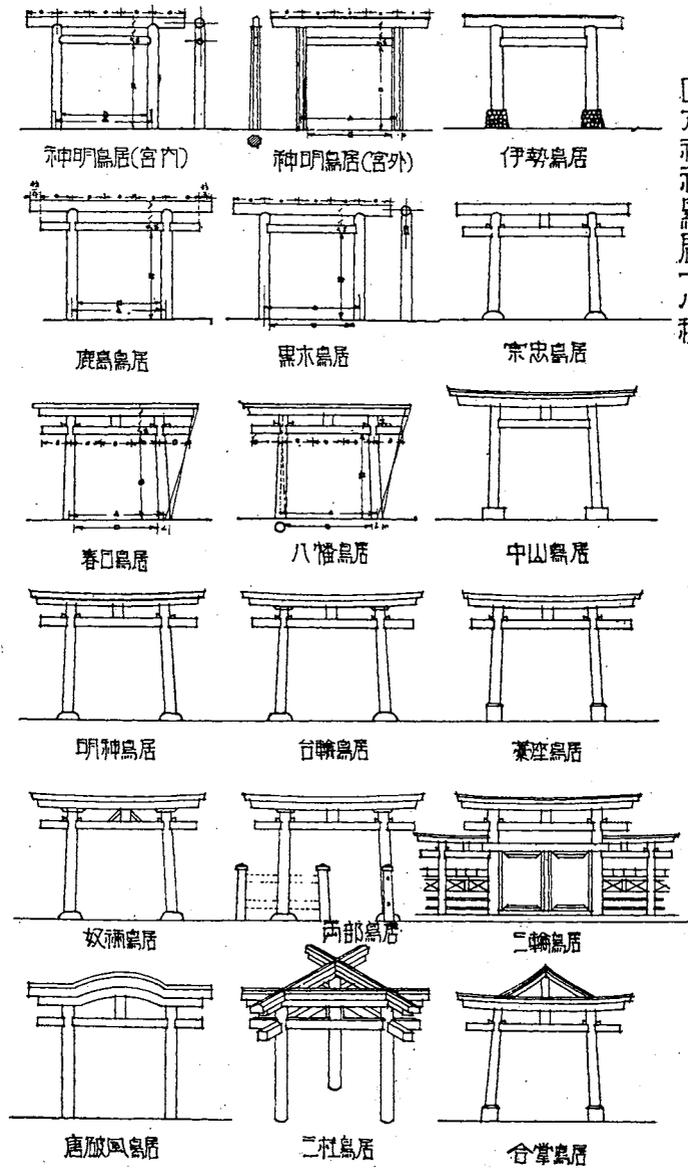
この冊子を手には神社内を歩いてみて下さい。新しい発見と出会います。

日本神社様式の壹

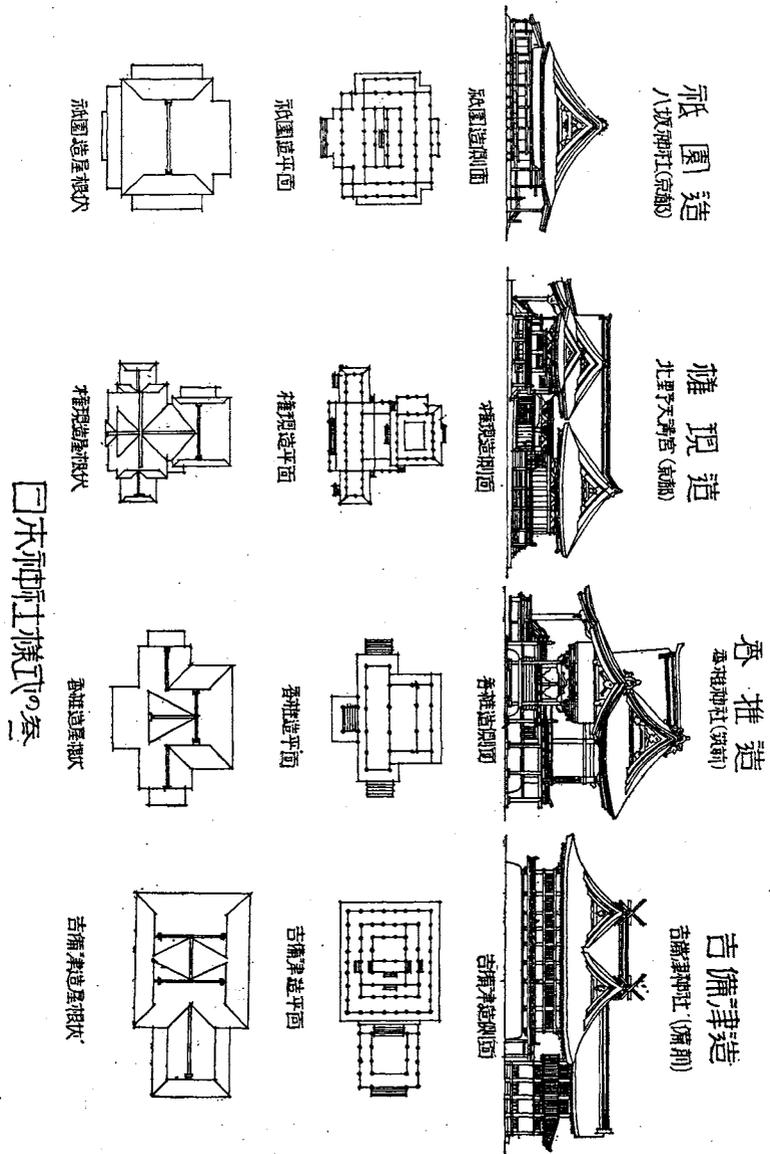


日本神社様式の貳





日本神社鳥居十八種



日本神社様式の参

一・神明神社の起源

神明神社の起源については、長祿二年（一四五八年）天台宗南教坊の別当となり朝倉氏の社領として造営したもので、天正二年、平泉寺滅亡の際、一炬に附せられ、その後豊太閤社地となり、現在の国泰寺の地に鎮座し、慶長十四年（一六〇九年）、現在の地に遷宮建立され、元和九年（一六二三年）、福井藩三十七石余りを与えられ、幾度の災いに接したが、本行院興福寺の別当として遷宮された。

興福寺と共に町の大火で再三の被害を受けながら明治を迎えている。

興福寺は安永十年（一七八一年）、勝山の大火によって神明神社と共に焼失し廃寺となり、以後再建はされなかった。

明治四年八月城東にあった小笠原家の鎮守八幡宮および沢の白山社等が神

明神社に移され合祀された。この頃神宮寺も廃寺になったと伝えられている。
現在の天立陽山氏は第四代目の宮司である。



流れ造の神社本殿 西側



社明神社縣町山縣郡野大縣井福
拝殿 (大正時代)



社明神社
拝殿 (昭和初期)

二．境内を歩く

本町の武藤病院の前、神明坂（お倉坂）を登ると旧神明通り南正面に高さ四メートル余りの大鳥居（神明鳥居）が建ち、脇に「神敬」と書かれた古い高札が建てられている。

この鳥居は、昭和九年、横浜市川本与吉氏が寄進したものである。本町雲平通り前からの表参道には明治三十七年に製糸機業の有志が奉納した石燈籠があり、次いで昭和の御大典を記念した、松村宇市氏奉納の六メートル余りの大鳥居、村井弥三郎氏奉納の石燈籠が建ち、七里壁を登る石段（最近修復された）の中程左に東郷平八郎選額の斉藤治兵衛氏の消防頭彰が建ち、正面には明治三十九年、勝山消防組が寄進した自然石の大きな献燈があり、その前に明治四十四年九月に豊島岩吉氏の寄進による石燈籠があり、石段を

登り成器堂の前には、これも御大典記念の奉猷と書かれた大きな狛犬が建てられている。この表参道は成器堂が神明神社に社務所として移築された明治四十四年前後に整備されたものと考えられる。この参道七里壁の南側下には昭和の中頃まで清水が湧いていた。

平成十六年、石段や玉垣が整備された。

境内東側くらがり横町からの入口の稻荷鳥居（明神鳥居）は勝山出身の福井市大和中町の瀧太蔵氏の寄進のもので昭和五年に建てられた。

白山社前の狛犬は、昭和九年、岡崎市の成瀬大吉氏の奉納したもので、岡崎で造られている。



神社表参道



南正面大鳥居



東参道入口



成器堂前 狛犬 (昭和御大典記念)
 上 阿
 下 吽



齊藤 治兵衛 碑



消防団寄進 石燈籠



現在の拝殿



拝殿 千鳥破風と唐破風

三・神社配置図

正面本殿より

(東)

- ①白山神社 祭神 イザナミノミコト 伊邪那美命 (明治四年沢より遷座する)
②金鑽神社 祭神 スサナオノミコト 須佐之男命

(旧八幡宮より白山社に合祀された小笠原家信仰の神である)

- ③天神社 祭神

ホノイカズチノカミ 火雷神 (八幡社より白山社に合祀)

(中央)

- 本殿 祭神 天照皇大御神

アマテラススメオホミカミ
トヨウケヒメノカミ 豊受比賣神 (食物を主宰とする産霊の女神)

合祀

八幡社 祭神 ホンダワケノミコト 譽田別尊 (海山の神)

小笠原 貞宗 (清長の子)

長野県松尾に鎮座する小笠原家の鎮守

(西)

- ①秋葉神社 祭神

ヒノカグツチノカミ 火之迦具土神
ホムスビノカミ

- ②市姫神社 祭神

イチキシマヒメノミコト 市杵島姫命
火産靈神 (火災を避け火を鎮める神)

(市姫と称し商売の神で上袋田区の氏神。弁財天とも言う)

- ③稻荷神社 祭神

ウカノミタマノミコト 倉稻魂命
ウケモチノカミ 保食神 (食物の神)

合祀 東照神社 祭神

徳川 家康 (旧藩主邸より遷宮した神)

享保元年の石燈籠



円筒形の石燈籠



白山神社



市姫神社

白山社の後に、昭和三十七年、村を離れた暮見谷の人々の村社、白山神社が建っている。

現在の神社拝殿は昭和十一年に建立されたもので、工費一万七千円をもって同町大工組合 森下 森之助氏および材木商 和田 十作氏との間に請負契約を結び、大工 山本 藤八氏が棟梁となり建てられた。九月十六日に竣工式が行われ、勝山町立二百五十年の式典も行われた。なお、旧拝殿は西隅に移築され宝物殿とした。

本殿は流れ造りになっており、拝殿前の石燈籠は明治四十二年、長渕の多田 六之助の奉納によるもので境内には二十基余りの石燈籠がある。古いものでは稻荷神社前の享保六年（一七二一年）辛丑の澤原 孫三郎氏 寄進（中原 彦七郎氏 作）の石燈籠や、東側石垣上の元禄四年（一六九一年）、小笠原氏入封の際、八幡宮に家臣が奉納したと思われる小さな燈籠が建っている。この

石燈籠は泉水の所に埋もれていたが、三年前に現在の場所に復元したもので、もう一基は成器堂の裏庭に建っている。

また、東照宮の横の円筒形の高い石燈籠は昭和五年に川上 儀治松氏が寄進したものであり、珍しい燈籠である。

昭和時代まで神社の御泉水があったところに、三本足の大きな雪見燈籠が残っており、泉水を昔どおり復元したいものである。

西側秋葉神社の前に大きな神馬が置かれているが、これは二代目の神馬で、最初は昭和十年、上杉 周治郎氏が奉納したが大東亜戦争の時応召され台石だけ残り、昭和四十八年、氏子によって再建されたもので富山県高岡市で造られたものである。

昭和の頃には境内は榎や杉の大木で繁っていたが、昭和四十年の台風で倒れ、その後伐採され現在は広々としている。東側石垣の上にも何本かの杉の



小笠原藩士奉納 石燈籠（元禄4年）



鈴木 定七の碑

木が立っていたが、台風などの被害を防ぐために伐採された。
この石垣の上に藩の剣客であった鈴木 定七氏の石碑が明治二十年に建てられ、碑文は勝山の書家 西脇 呉石（静）氏の書である。
先に記した境内西隅、手水舎前の宝物殿は、昭和四十六年、片瀬地区の白山神社の拝殿として移築された。



神馬



宝物殿 現 片瀬の白山神社拝殿



雪見燈籠



拜殿前 石燈籠
多田 六之助 寄進
(明治 42年)



昭和48年 境内東側



同上 平成19年

四・神明社供物

神明本殿は流れ造りで、拝殿は破風と唐破風からなり、昭和十一年に建てられたもので、中にはいくつかの扁額が掛けられている。まず正面の蘭陵王の絵馬は大正四年に奉納されたもので、蘭陵王は、古代中国の南北時代、斉の国に蘭陵王長恭という武勇才智に長け、顔が美しく優しい男であった。

ある時、戦場では優しすぎて威令が及ばないために一計を案じ、いかめしい龍の仮面をかぶって周の軍と金燭城で戦い、大勝したと伝えられている。その姿を舞曲にしたもので一人で舞う左方の走舞いとして有名で、中国伝来のものだが面や舞振りがタイ・ミャンマーの仮面に酷似しており、南方系でインドシナ方面より伝承されたものと考えられる。

この絵馬を描いた山本 永暉は、慶応元年、大阪西区の両替商沖田 太郎兵衛の次男で幼名 増次郎といい、十三歳の時、四条派画家 橋本 雅美や狩野 深美に学び、悟雲洞大機と号した。

県内には敦賀 金ヶ崎宮の楠 正成と鷹の絵の衝立、武生 引接寺の鳳凰、大野 清滝神社の六歌仙、柳廻神社の方才楽など、他にも多くの作品が残されている。彼は二度目の妻のいる福井に転居し、八十八歳でこの世を去ったが、無名の天才画家であった。

正面右には海軍大将で福井県出身の三十一代総理大臣 岡田 啓介氏の書による「神威赫赫」（神の威力は光り輝く）と書かれた扁額、左には同じく頭山 満氏の「神威無窮」（神の威力は無限である）の扁額があり、左側には、昭和十五年に紀元二千六百年記念として本町の松村 国平氏が奉納した珍しい面額（天狗と烏天狗）が掛けてあり、西側には、昭和十年の国勢調査時に氏子総代が調査した各町内別の人口・世帯数を表した額がある。



岡田 啓介 扁額



頭山 満 扁額

また天明五年（一七八五年）に本町の横山某が奉納した「神明宮」の神社額や明治三十二年に奉納された名古屋城の絵馬、安田 十兵衛などが奉納した「降福祠」の神社額、昭和十六年に奉納された神輿と山車、大太鼓などがある。神輿は昭和五十年頃までは町内の青年団によって各町内リレーで担がれていたが、その後傷みが激しくなり中止され、現在は車で曳いている。その他に小笠原家紋入りの御膳なども残されている。



昭和10年 国勢調査表



山本 永暉 画 絵馬額「蘭陵王」



名古屋三師団給馬
(明治22年元旦)



松村 国平 奉納額

降福祠額
表



裏
寄付主 安田十兵衛他

天明5年(一七八五年)
横山氏奉納 神明宮額



表

裏

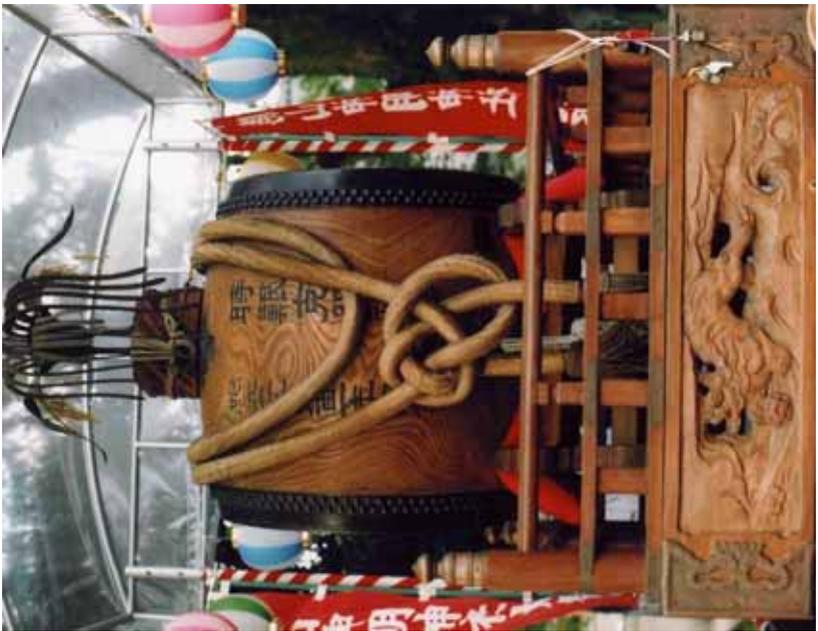
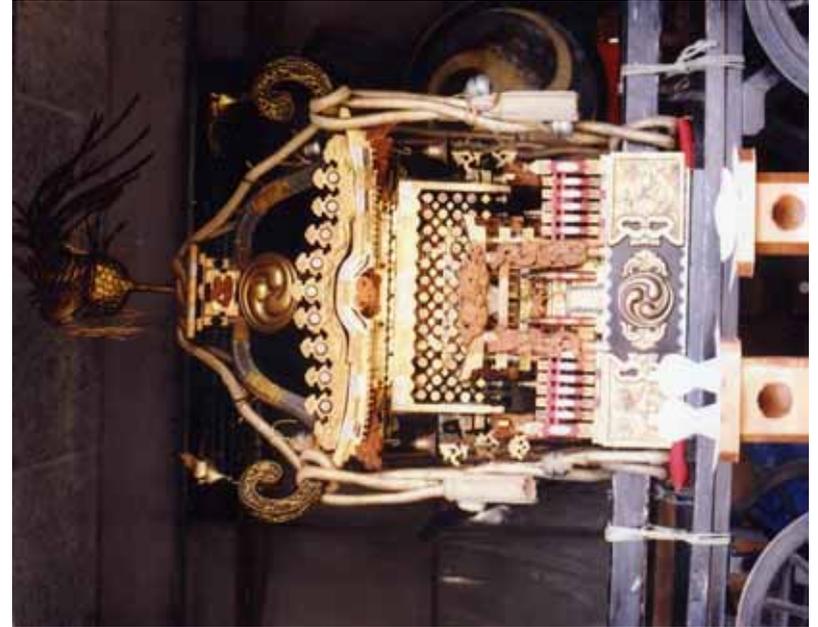




昭和16年 町中を練り歩く神輿と太鼓
(後町通り)



昭和16年 御神輿奉納 スナップ



御神輿奉納額



大和流弓術尺二の千射額 (勝山市教育会館ロビー展示)

江戸時代、天保九年に行われた藩士十七名による大和流弓術尺二的千射の額（成績表）が神明神社の土蔵西側の軒下に保管されていた。横五六〇センチメートル、縦八十五センチメートルの大きなもので、おそらく八幡宮から移されたものと思われる。平成三年の小笠原三百年記念の時に公開され、現在、勝山市教育会館ロビーに展示されている。勝山藩の武術が優れていたことが伺われる貴重な文化財である。

小笠原家の鎮守として信仰した松尾の八幡宮は譽田別尊、身長足姫尊、武内宿弥を祀り、正嘉元年に領主小笠原長政（長将）が再建したのに始まり、領主の崇敬が篤かった。勝山にも建立された八幡宮の祭神は小笠原貞宗である。

五. 神明祭と御前相撲

おしんめさんの祭は九月十七日、十九日の三日間行われ、本町見付けから境内の中まで夜店が並び、県下でも有数の秋祭りである。

境内では、ガマの油売りや鉄砲落し、トコロテン、輪投げなどの店が並んでいた。青年団によって大きな神輿が担がれ町中を練り歩き賑わった。夜店（露店）では今ではもう見られなくなったハツカパイプ、お面、布やバナナの叩き売り、表札、占い師、へび使い、瀬戸物屋、金魚すくい、賭け将棋、パチンコなどが百数本並んでいた。

祭りになると本町通り（上袋田区）に上袋田壮年会が寄贈した大きな案内提灯が二張り立てられたが、年番の老齢化によって危険ということで立てなくなつた。また、各家の軒下には祭りの風物詩である鶏（伊勢神宮の神鶏）

の描かれた祭提灯が吊られるが、近年は飾る家も少なくなつた。伊勢信仰以外では「献燈」と書かれているものが多い。

この鶏の描かれた提灯は、上袋田区では昔は町内から移転する時はその家に置いていくか町内に返しておく風習があった。また、提灯は案内提灯を除いて一軒一張りとは定められていた。

勝山地区には神明祭の他にも多くの祭りが行われており、地区のエコ再発見として紹介しておきます。

神明祭案内大提灯
本町通り 大手坂 下
(昭和62年)



ふる里再発見 祭りでおおじ

祭り名	月 日	場 所	主催団体	祭 神
愛染まつり	五月第三土曜日	長山公園	沢区・芳野区	愛染明王
太子講	五月第三土曜日	長山公園	勝山建築組合	聖徳太子
三宅荒神祭礼	五月二十七日	大蓮寺	門徒	火産霊神
市姫神社祭礼	六月八日	神明神社内市姫神社	上袋田区	市杵島姫命
薬師夏祭り	六月八日	お薬師さん	上後区	薬師如来
べっこう祭り	六月十日	国泰寺	同寺	金毘羅宮
○秋葉さん祭り	六月十八日	神明神社	同社	火産霊神
上清水不動祭り	七月十五日	上清水	上後区	不動明王
○念佛まつり	七月十八日	念仏寺	同寺	
お茶所まつり	七月二十四日	見性院	下長洲区	臨濟宗妙心寺
大清水まつり	七月二十八日	大清水	下後区	不動尊
○神宮寺祭り	七月二十九日		元禄区	

稲荷まつり	八月一日	稲荷神社	上長洲区	保食神
毘沙門祭礼	八月四日	建雷神社	下袋田区	毘沙門天
地蔵まつり	八月七日	義宣寺	富田区	地蔵尊
勝ち山夏物語	八月十三日 ～十六日	市内	勝山夏祭実行委員会	
えんまはんまつり	八月十三日	十王堂	元町三丁目区	閻魔大王
○八幡社大祭礼	八月十五日	神明神社		鶯大刀の祭り
顕如講	八月二十四日	後町通り	尊光寺	顕如上人
神明秋祭り	九月十八日	本町通り	神明神社	小笠原 貞宗
こんめさんまつり	十月	光明院	沢区	高星彦命
○庚申まつり	十月	庚申野	芳野区	猿田彦命
年の市	一月最終日曜	本町通り	勝山商工会議所	
左義長まつり	二月最終土・日	勝山地区の十三区	左義長祭実行委員会	年徳大明神

※現在行われている祭日とは異なることがあります。

※○印は現在行われていません。



昭和14年 御前角力風景



昭和25年 御前角力風景

おしんめさんの祭りでも最も有名なものが、明治時代から続いていた御前相撲で、寄方、宮方に分かれる七分三分の相撲であった。

境内中央の七尺以上もある高い土俵を囲み、西側には十七席の棧敷が設けられ、町の有志が棧敷券を買い見物した。棧敷券は株券のように譲り渡すことができた。南側には町内別に席があり、東側は地元元禄の士族の見物席となっていた。勸進元の氏子総代は正面に席があった。

明治四十三年より創立された会計表には、経費は約九十円であった。

また、角力の花（祝儀）は、大関壱円、関脇七十銭、小結五十銭、前頭三十銭、二十銭であった。

御前相撲は昭和四十年頃まで続いていたが、現在は市民体育大会 地区対抗戦となっている。御前角力の行司 木村 利三郎氏が明治四十一年に引退したときの案内折込が残っている。



昭和34年 青年団相撲大会



昭和26年 御前角力風景



平成19年度市民体育大会相撲競技 現在の土俵



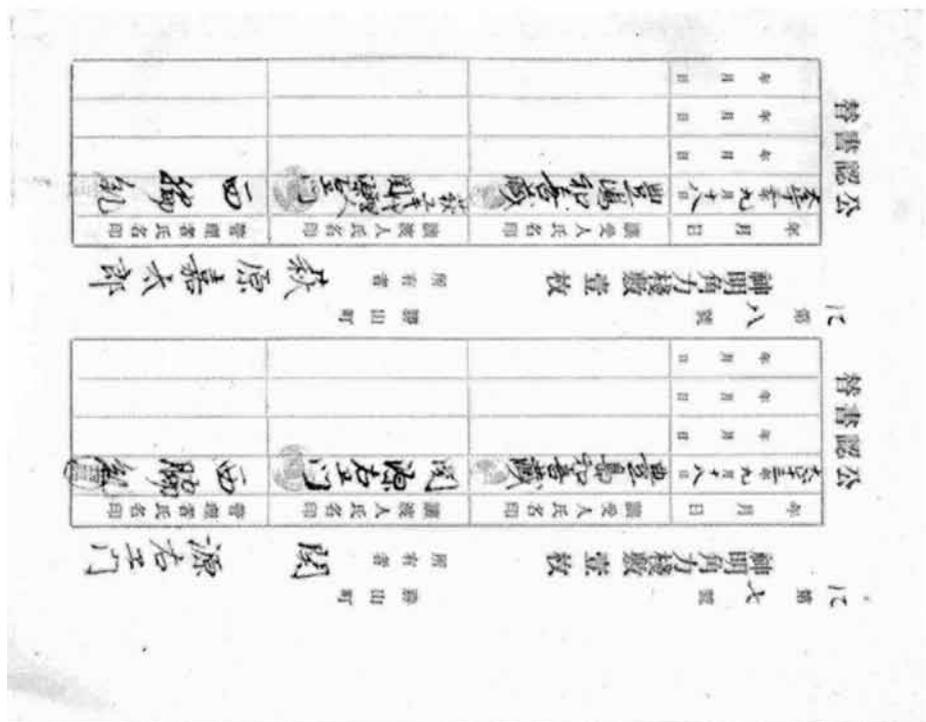
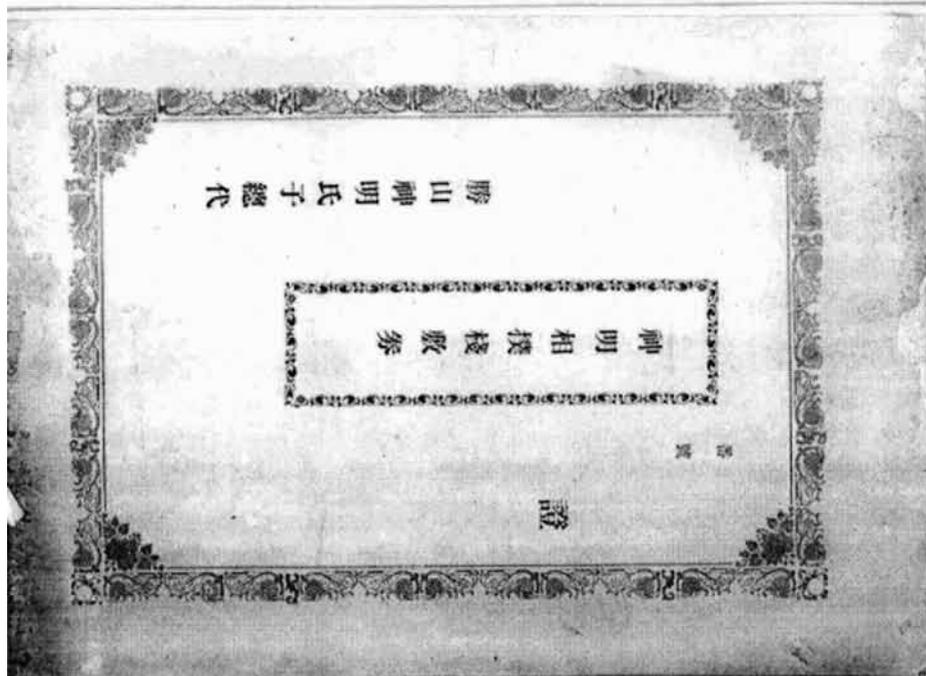
昭和30年 御前角力風景



行司 木村 利三郎 氏 引退チラシ (明治41年)



御前角力に使用された軍配



神明相撲棧敷券 (大正13年)

六・東京大相撲の巡業

御前相撲の外に昭和時代中頃、東京大相撲の地方巡業が神明神社境内で行われた。勧進元は料理組合や土建業などの有志であった。

昭和二十三年に立浪部屋の横綱 羽黒山一行、昭和二十八年には横綱 千代の山一行、また昭和三十年には横綱 吉葉山、大関 三根山らも来勝し、テレビもなく本物の力士を見たこともない時代で、町中が賑わい清風など料理屋や旅館の店先に、宿泊している力士の名が書かれた半紙が張られ、子どもたちは人気力士のサインを求めた。

また昭和三十一年には再び横綱 千代の山、同栃錦の出羽の海部屋一門が弁天河原で巡業し巨漢大起などに人気が集まった。親善野球も行われた。



横綱 吉葉山の土俵入り

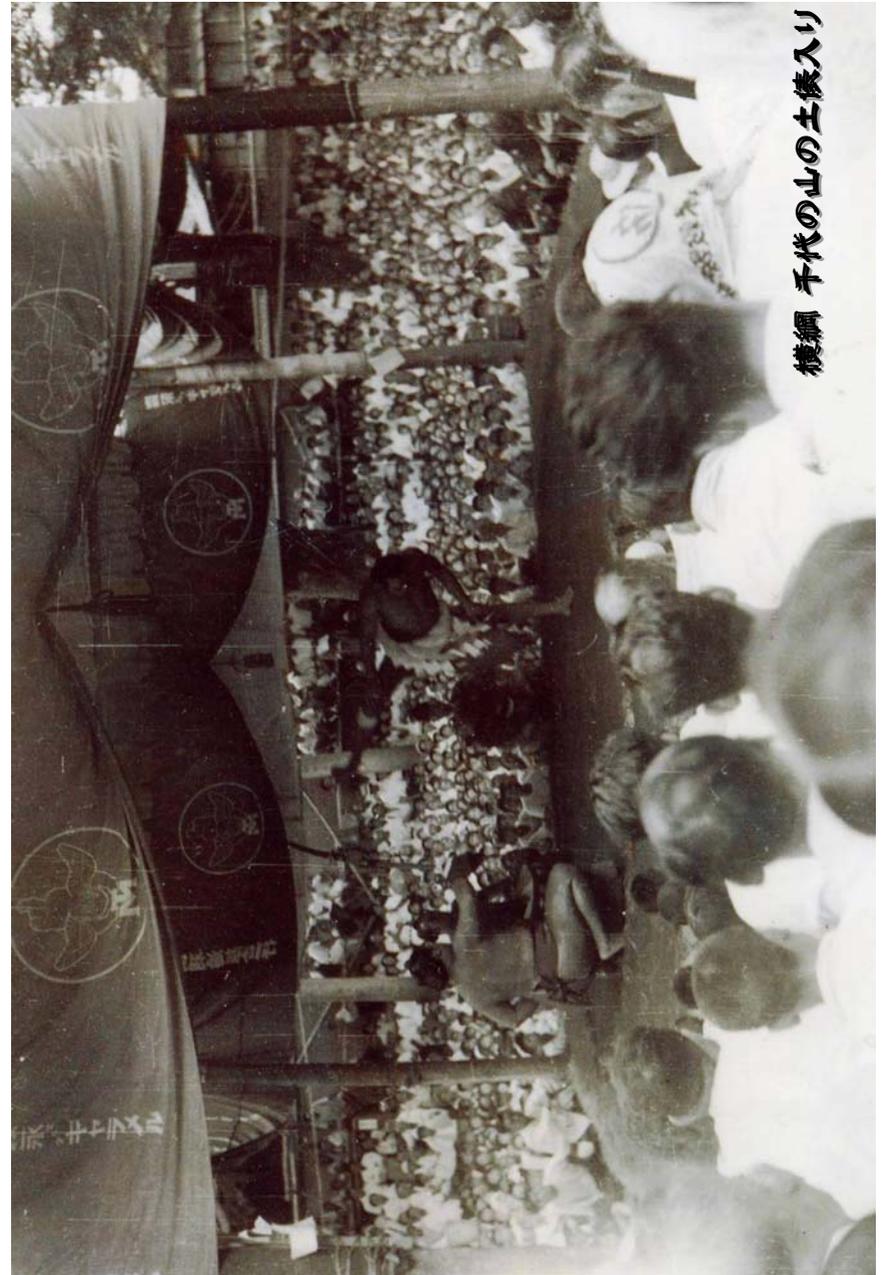


勝山芸者組合の戦捷祈願 (昭和7年)

七. 神社スナップ



学童による戦捷祈願 (昭和18年)



山の土俵入り



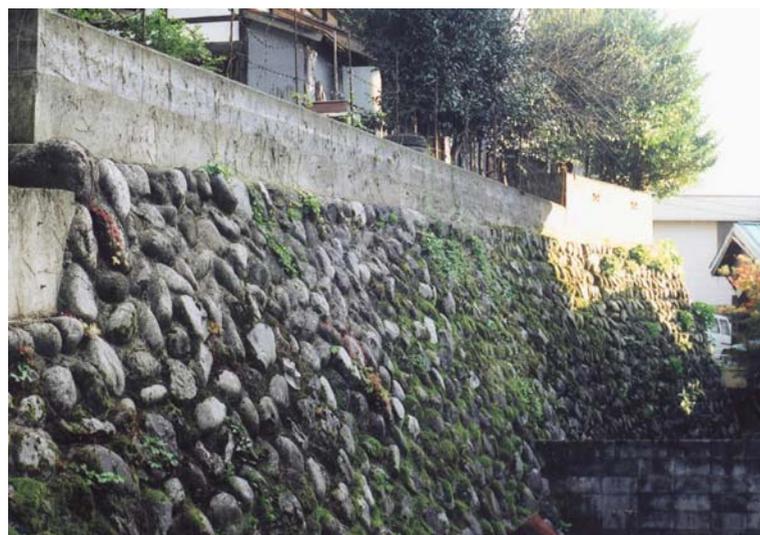
拝殿の唐破風の彫物



勝山芸者の初詣 (昭和36年)



手水舎



成器堂下の七里壁

参考資料

日本社寺古建築鑑識資料 全

(芸苑社 発行)

勝山神明神社

勝山おもしろ読本 第二集

勝山神明神社物語

発行 勝山地区エゴ推進協議会

わがまちげんき創造事業

文と写真 丸屋 仁志

監修 勝山神明神社

宮司 天立 陽山

協力 勝山公民館

発行日 平成二十年一月二十日

